

第18回日本糖尿病・妊娠学会 に参加して

(奈良県新公会堂にて、2002年12月7日～8日)

福井 トシ子

1985年12月に、大森安恵本会理事長、望月眞人神戸大学名誉教授など、内科、産婦人科、小児科領域の先生方が提案されて、「糖尿病と妊娠に関する研究会」が発足した。その後研究会は、「日本糖尿病・妊娠学会」へと発展している。

妊娠初期の血糖コントロールの重要性、妊娠糖尿病の早期発見の方法、糖尿病合併妊婦の母児の合併症を回避するための、妊娠中の血糖コントロールの方法、分娩から産褥にかけての母児管理、糖尿病妊婦から出生した児の長期予後などが、毎回熱心に討議されて、わが国における糖尿病合併妊婦の治療と成績に大きく貢献してきた。

2002年12月7日・8日に奈良県新公会堂(奈良市)で行われた、第18回日本糖尿病・妊娠学会を紹介させていただく。

第18回学術集会では、糖尿病の病態、糖尿病管理、糖尿病合併症に関する最新の知識を得られるようにプログラムされていた。また、妊娠中の糖尿病合併妊婦の至適体重増加や、血糖コントロールを評価する臨床データについては、特に毎回討議されるが、今回の学会では、「糖尿病合併妊婦の体重管理はどうするか」というシンポジウムが行われて討論された。さらに、今回は、石井均氏による、糖尿病患者への心理的アプローチ—妊娠出産の心理的問題とその援助—をランチョンセミナーで拝聴することができた。糖尿病と妊娠を



招請講演の座長大森安恵先生(右)と Prof. Lois Jovanovic (U.S.A) (Sansum Medical Research Institute)

巡って多角的に討論されたきた本会であるが、妊婦の心理に焦点をあてた内容は極めて少なかったため、大いに参考になった。

石井氏によると、糖尿病をもつ妊婦の診療にあたっては、単に計画妊娠、正常に近い血糖コントロール、セルフケア行動の実行度の評価を行うだけでなく、その努力を評価していく必要がある。適切な援助があつてこそ、良好な血糖コントロールが長期に渡って持続できるという講演内容は、「糖尿病妊娠の管理」ではなく、「糖尿病とともにある、妊婦への治療、ケア」を強調されたと思う。

本会は内科、産科、小児科はもとより眼科、泌尿器科、看護学、助産学、栄養学等の各分野から一堂に会して学ぶことのできる数少ない学会である。筆者は、コメディカルで助産師である。本会には毎回参加しているが、実に多くのことを学ばせていただいている。

第19回は、新潟市民プラザで本年10月24日、25日の両日開催される。■

ふくい としこ

杏林大学医学部付属病院 総合周産期母子医療センター

(〒181-8611 東京都三鷹市新川6-20-2)

第2回京都糖尿病医学会学術講演会

(京都市, 2002 年 11 月 30 日)

本誌の編集顧問土井邦紘先生(全国臨床糖尿病医学会会長, 京都糖尿病医学会会長, 土井内科院長)から第2回京都糖尿病医学会学術講演会が開かれるので取材するようにとのご案内がありうかがいました。全国に先駆けて京都府医師会が会内に設置した本会は, 会員 260 名で, 糖尿病専門医と一般医療機関のよりよい医療連携と糖尿病治療を地域で包括的に対応することを目的にしています。実地医家だけでなく大学や病院医師も参加し, 内科, 眼科, 透析など専門医集団で構成されています。会場で土井先生からこのたび創刊された「京都糖尿病医学会会報」をいただきました。この中で土井先生は, 「年2回の学術集会と年2回の学習会を予



第2回京都糖尿病医学会学術講演会で挨拶する土井 邦紘先生

定している。特に学習会は当番制を敷き, 病診連携をテーマにしており, 多くの先生方の参加をお願いしたい」と述べておりますが, 新雑誌「糖尿病診療マスター」も本会の発展とともに歩みたいと思いました。今回の学術講演は, 「糖尿病と心臓病」(洛和会音羽病院中島久宜先生)と「糖尿病性腎症の進展予防と浮腫・溢水に対する対策」(京都大学腎臓科小野孝彦先生)の2題でしたが, いずれも本会の趣旨に沿った優れた臨床情報を提供するものでした。

(本誌編集室)